

第9回グローバル教育セミナー

難民問題とグローバル教育Ⅱ

日時

2017年11月10日(金) 10:30~12:10

場所

宇都宮大学峰キャンパス 5B12教室(5号館B棟)

*参加費無料:どなたでもご参加いただけます。

プログラム

10:30~ はじめに:挨拶

佐々木一隆 (宇都宮大学国際学部 学部長/教授)

10:35~ 趣旨説明

重田 康博 (宇都宮大学国際学部 教授/国際学部附属多文化公共圏センター 副センター長)

10:40~ 学生によるワークショップ「難民問題と私たち」の紹介

発表者: 第9回グローバル教育セミナー学生実行委員

10:50~ 基調演講 **阿部真理子** (認定NPO法人 IVY 理事)

「イラクにおけるシリア難民支援から見える難民問題について
~NGOの現場から」

11:50~ コメント 松尾 昌樹 (宇都宮大学国際学部 准教授)

11:55~ 質疑応答

12:05~ 終わりに 田巻 松雄 (宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター センター長)

12:10 終了

主催: 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

後援: 宇都宮市、宇都宮市教育委員会、(公財)栃木県国際交流協会、NPO法人宇都宮市国際交流協会

協力: NPO法人開発教育協会、まちなか・せかいネット-とちぎ海外協力NGOセンター

*後援および協力については申請中

講演者紹介

阿部 真理子 認定NPO法人 IVY 理事

IVYのフィリピン部門スタッフとして、1998年活動開始。2000年から国際理解教育部門責任者、2002年IVY理事就任。国際協力への理解促進、国際理解教育の普及を目指し、大学・小・中・高の学校やJICA教師海外研修、市民向けセミナー等で、国際理解教育のワークショップのファシリテーターを務める。シリア・イラク支援部門、カンボジア部門の副担当。外務省NGO相談員。2010年から（特活）開発教育協会理事。

趣旨説明者(多文化公共圏副センター長)紹介

重田 康博 宇都宮大学国際学部教授/附属多文化公共圏センター (CMPS) 副センター長

専門分野は、国際開発研究、国際NGO研究。国際協力NGOセンター (JANIC) 政策アドバイザー、オックスファム・ジャパン監事。開発教育協会評議員。著書に、重田康博『激動するグローバル市民社会—「慈善」から「公正」への発展と展開』(明石書店 2017年)、重田康博「第2章『公正な社会』って、どんな社会?」西あい、湯本浩之編著『グローバル時代の「開発」を考える—世界と関わり、共に生きるための7つのヒント』(明石書店2017年)、重田康博「第4章ミレニウム開発目標」田中治彦編著『開発教育』(学文社 2008年)、重田康博『NGOの発展の軌跡』(明石書店2005年)、他。

コメンテーター紹介

松尾 昌樹 宇都宮大学国際学部 准教授

2004年東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程修了(博士:国際文化) 専門は中東政治経済(特に石油輸出入と移民が体制変動に及ぼす影響)。主な著書に、『湾岸産油国 レンティア国家のゆくえ』(2009年、講談社)、『オマーンの国史の誕生 オマーン人と英植民地官僚によるオマーン史表象』(2013年、御茶ノ水書房)。共編著として『中東の新たな秩序』(2016年、ミネルヴァ書房)。

実行委員紹介

阪本 公美子	宇都宮大学国際学部准教授
湯本 浩之	宇都宮大学留学生・国際交流センター准教授
大浦 智子	とちぎYMCA
根本 久美子	大学院国際学研究科博士後期課
高階 悠輔	大学院国際学研究科博士前期課程2年
森島 光太郎	国際学部国際社会学科2年
田口 瑞輝	国際学部国際社会学科2年
岩上 享子	国際学部国際社会学科2年
谷口ジェニフェ	国際学部国際社会学科2年
ホアンアン	国際学部国際社会学科2年
渡辺 早希	国際学部国際社会学科2年
田畑 達也	国際学部国際社会学科2年
鈴木 アリサ	国際学部国際学科1年
日向 登雅	国際学部国際学科1年
田中 禰織	国際学部国際学科1年
原口 愛	国際学部国際学科1年
丁 美誉	国際学部国際学科1年
張 梓懿	国際学部国際学科1年
堀越 桃奈	国際学部国際学科1年
小山 彩花	国際学部国際学科1年
中村 茉央	国際学部国際学科1年
駒形 麻朋美	国際学部国際学科1年

■ アクセス

宇都宮大学峰キャンパス



■ お問い合わせ

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

TEL/FAX : 028-649-5228

E-mail : tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

はじめに

本報告（105～113頁）は、多文化公共圏センターの主催により、2017年11月10日に開催された「第9回グローバル教育セミナー」の内容をまとめたものです。

ここ数年、シリア内戦と難民の中東や欧州への流入のニュースが数多く報道されてきましたが、今年に入りIS軍の支配地域の縮小により報道の数も少なくなってきました。それにも関わらず、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）によると、2017年3月30日現在シリア難民の数は500万人を超えたと発表され、また国連人道問題調整事務所（OCHA）は、同年06月15日シリア難民の数は約510万人、国内避難民は約650万人、シリア国内では1,350万人が人道支援を、900万人が食料支援を、610万人が教育支援を必要としていると発表しました。

さらに、難民はシリアだけでなく、発展途上国に多く存在しています。2016年のUNHCRの支援対象の難民1,720万人のうち、発展途上国で避難生活を送る難民は1,450万人（84%）、後発開発途上国ではUNHCRの支援対象の難民の28%にあたる490万人の難民に庇護を提供しています。全難民のうち51%が18歳未満の子どもです。また、全難民の55%がシリア（550万人）、アフガニスタン（250万人）、南スーダン（140万人）の3カ国で占められています。難民の受け入れ国はトルコ（290万人）がトップで、パキスタン（140万人）、レバノン（100万人）、イラン（97万9,400人）、ウガンダ（94万800人）、エチオピア（79万人）と続き、一方先進国の庇護申請数では、ドイツ（72万2,400人）、アメリカ（26万2,000人）、イタリ

ア（12万3,000人）、トルコ（7万8,600人）と続きます。（UNHCR調べ）。最近では、ミャンマーで迫害に遭いバングラデシュに逃れた、多くのロヒンギャ難民が注目されています。

そのような難民に対して、過去からずっと難民の受け入れに厳しいのが日本です。2017年の難民申請数は19,628人で、前年に比べ8,727人増加し、過去最多となりましたが、その内難民認定はわずかに20人で、前年に比べ8人増加しました。この他、人道上の配慮を理由に我が国での在留を認めた者がシリア人、ミャンマー人など45人、これらを合わせて65人に対し、難民認定申請の結果、日本での在留を認めています（法務省入国管理局2018年2月）。難民申請を認可されなかった方々はその後の日本で仮放免として滞在しています。彼らの日本での生活を把握するために、昨年引き続き今年も北関東医療相談会が医療支援や医療相談を行う栃木県済生会宇都宮病院において本学部の学生と教員が仮放免の方々にインタビューを行いました。

私たち日本人は難民に対して何ができるのでしょうか。難民の受け入れ状況を改善するために政府に対して何を訴えていかなければいけないのでしょうか。私たちはまず難民が置かれている現状を知ることから出発し、そして次の「行動」へとつなげていかなければなりません。

第9回目にあたる今回は、「難民問題とグローバル教育Ⅱ」をテーマに開催し、シリア難民を支援している「認定NPO法人IVY」理事の阿部眞理子さんに、「イラクにおけるシリア難民支援から見える難民問題について～NGOの

II 活動報告

現場から」と題し基調講演をしていただきます。また、実行委員会の学生たちが数ヶ月の準備の末行ったワークショップを紹介しながら、世界と日本にいる難民の実態と課題を把握し、難民問題の解決のために国際協力・地域レベルで大学生ができること、グローバル教育が果たす役割を考えます。

最後に、本セミナーで後援・協力いただいた宇都宮市、宇都宮市教育委員会、NPO法人宇

都宮市国際交流協会、（公財）栃木県国際交流協会、NPO法人開発教育協会、まちなか・せかいネットーとちぎ海外協力NGOセンター、調査に協力いただいた北関東医療相談会の皆様に感謝を申し上げます。

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
副センター長 重田康博

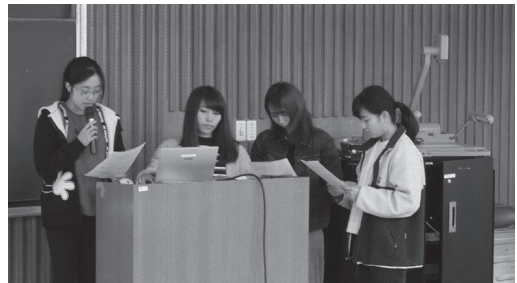
第9回グローバル教育セミナー報告 難民問題とグローバル教育II

学生によるワークショップ「難民問題と私たち」

私たちは国際学部国際学科1年の堀越桃奈、田中樺織、丁美誉、駒形麻朋実です。先々週の10月27日、「多文化共生コアC（地球市民社会論）」の授業の中で、学生主体のワークショップを実施しました。ワークショップの目的は主に3つあります。一つ目が「グローバル教育セミナー」の導入として、皆さんに難民問題について考えてもらうこと、二つ目が目に見えないような課題に対して意識を高めてもらうこと、三つ目が難民の置かれた状況の厳しさや、逃げる過程の困難をしてみてください。

まず初めにワークショップの流れについて説明したいと思います。最初にNGOのSave the Childrenが制作した「もしシリアで起きていることがイギリスで起こったら？」という仮定の下、一人の女の子が置かれる状況の変化を映した映像を見ました。続いて難民についての解説、誰が難民として認められるかのクイズを行い、具体的にロールプレイで難民の逃げる過程を疑似体験してもらいました。その後感想のシェア、Save the Children制作の映像の続き、ロヒンギャ難民のキャンプの映像を鑑賞しました。ロールプレイの中でまずは「難民クイズ」を行いました。様々な状況が書かれてある9枚の紙の中から、難民の定義に当てはまるものを選んでもらい、難民というのはどのような人なのかということを知ってもらいました。この持ち物カードは、難民が逃げる糧の中で持ち物を選ばなければいけない難しさを体験してもらうために作成しました。例として、お菓子、家の

権利書、貯金通帳、パソコン、お弁当、トラベラーズブック、毛布、卒業証書があります。持ち物を選択するタイミングは2回あり、最初は38個から10個に、そして次に重量オーバーにより船が浸水するというハプニングで10個から3個までに減らしてもらいました。その後、なぜその3つを選択したのか理由を話し合ってもらい、いくつかのグループに発表してもらいました。この家族カードには、家族構成、それぞれの年齢、どのような人なのか書かれています。例として、父、51歳、某銀行の幹部として働いている。いろいろな人と付き合いがあり、顔が広い。このように一人一人に設定を付けました。そして船に乗る前に家族を4人から2人に減らしてもらいました。



このワークショップを通して学生から出た意見の一部を紹介します。「難民の定義が分かり、知識を得ることができた。」「荷物を選ぶ際、生き延びることを第一に考えるか、またはついでからのことも考慮に入れるかなどで意見が割れ、選ぶことの難しさを知った。」「日本での難民申請の難しさが分かった。」「難民が集まった先でも紛争が起き、本当の安全を手に入れることの難しさを知った。」「難民について知ることで、少しでも難民を受け入れるのは

II 活動報告

どうしたらよいかを考えることができると思う。」などがあげられました。

このワークショップを作るにあたり、今年の9月3日に、済生会宇都宮病院で行われた医療相談会に行き、難民申請中の方々にインタビューを行いました。その中で、4か国の5人の方にお話を伺い、現在困っていることとして、ビザ取得、家族の呼び寄せ、医療、仕事、資金、言語、入国管理局の対応、在留資格、生活保障という問題点が浮かび上がりました。難民として認定されていない多くの人たちは、今は「仮放免」という立場で暮らしています。そういった人たちは国民保険の加入や就労については認められておらず、1～2か月に1度、必ず入国管理局の許可を得なければいけません。そうした状況で、居住している地域から外へ出るためには許可が必要です。また難民申請中に突如収監されることもあります。今回のインタビューからは収監所の改善の必要性や適切な医療措置が行われていない現状が分かりました。そのほかにも、政府の難民申請者への対応が人道的配慮に欠ける現状も見られ、難民申請者が日本社会において社会的弱者として生活している現状を直視すること、またそれを公にしていくことが必要だと感じました。

今回のワークショップや済生会病院でのインタビューを通して、難民問題解決の難しさが分かりました。その中で、北関東医療相談会事務局長の長澤正隆さんの「共生するとはともに苦しみを分かち合うことができることだ」という言葉が印象に残っています。今回のワークショップでは、荷物を選択することや、家族を置いていかなければならない苦しさ・葛藤を疑似体験してもらい、苦しみを少しでも理解してもらうことを目的に考えました。しかし現実では難民の苦しさを理解するには限度があります。そこでですが、私たち学生は何ができるでしょうか？共生のために何ができるでしょう

か？この問いについて一人一人が真摯に考えていくことが重要になってくると思います。

基調講演「イラクにおけるシリア難民支援から見る難民問題について～NGOの現場から」

阿部眞理子（NPO法人 IVY理事）

最初の画面は、シリア難民の子供がIVYの補習校に通って勉強している写真です。IVYは、1991年の12月に設立された国際NGOです。そのころは、カンボジアの内戦が終結するころで、タイのカオイダン難民キャンプにスタディツアーで山形から行った人たちが、だいたい11人ぐらいいたのですが、その人たちが戻ってきて設立した団体です。カンボジアの人たちがタイから帰還した後の支援というところから始まりました。今は山形に本部があり、宮城に支部があり、イラクとカンボジアに事務所があります。一つ特徴的なのは、IVYは実は、海外協力支援だけではなく在住の外国人の方たちの支援というも行っています。山形にアジアから結婚のためにわたってきた女性たちが暮らしていて、その方たちの支援というのもずっと最初から行っています。もう一つIVY YOUTH（アイビー ユース）というのがあります。これは大学生が中心となっているのですが山形の学生と宮城県の学生、山形市と仙台市の学生なので一緒に活動しています。

カンボジアの小学生に算数ドリルを作って配るという事業を2010年からずっと続けています。それともう一つは地球社会キャンプといって、小学生を対象に環境教育と国際教育をミックスしたプログラムを自分たちで作って提供するという活動を1年間行っています。

これはODAの事業の一環となります。IVYでの事業はJAPAN PLATFORM（ジャパンプラットフォーム）からの助成金と日本NGO連携無償資金協力というこれもODAのお金を使って事

業をしています。

難民条約で規定されている難民の定義なのですけれども、これが1951年に制定されているというところが一つのポイントではあると思います。つまり、1951年といいますと、ちょうど朝鮮半島で朝鮮動乱という動乱が起きていた時期であって、東西の冷戦の時代だったわけですね。だから政治的な意味合いがこの難民条約の中には含まれているということが言えると思います。今、よく皆さんに「災害のために逃げた人々は難民と呼ばないのか」と聞かれることが多いのですが、この定義の中にはそのような人々は入っていないのです。なので、今地球環境の問題で別の国に避難するということが起きたりしているのですけれども、その人々も難民条約という範囲の中には入っていないということが現状です。ですから、難民条約が制定されたときの現状と現在の現状が違ってきているのではないかと、私は感じています。今日お話しするのはイラクのシリア難民の支援のことですけれども、イラクの場合はISの影響によってイラク国内で避難している人々が相当数います。ほとんどの方たちがもう一つの難民と書いてありますけれども難民の方たちと同じような状況に置かれているので、同じような支援を行っています。

さて、去年は国内避難民を合わせて世界で何人の難民がいたでしょうか？ 難民と言っても申請をしている人、国内避難民の方も合わせての数なのですけれども、どれぐらいだと思えますか？ 今、大体世界の人口は72億~74億人になっていると思うのですが、どれぐらいだと思えますか？ 6,560万人です。これは2016年のものなのですけれども、2015~2016の間は数的には30万人くらいしか増えることはなかったのです。けれども、その前の年は、IS (ISRAM STATE) のこともありましたし、シリアの内戦が激しくなっていくということも

あり、その2014年~2015年の間は一年で500万人も増えた時期でした。IVYがイラクにおいて支援を始めたのは2013年なのですけれども、その頃はどンドンンドンシリア難民が増えている時期でした。さて、簡単なクイズなのですけれども、今2016年末に、世界で最も多く難民を出しているのはどこの国でしょう？ 以前はアフガニスタンがやはり一番多かったのです。難民の数としては。それと南スーダンにおける難民の問題も問題となっているのですけれども、最も多いのはシリアです。それからその中の子供が占める割合はどのくらいだと思えますか？ 実は難民の人たちの中の半分が子供です。

どのように逃げるかという、ヨーロッパに逃げた人々の数は書いていないのですが、周辺国で避難した難民が一番多いという国はトルコです。やはり近いということもありますし、ヨーロッパに逃げる時にトルコ経由でヨーロッパへ避難する人も多いようです。それとヨルダンに避難する難民も多いです。そしてIVYは実はここに書いてないクルド自治区というところがあるのですけれども、そこに事務所があります。今世紀最大の人道危機という言葉方をしているのですけれども、シリアから他の国に逃げた人々は486万人。それからシリア国内で避難した人々は632万人と言われていまして、シリアのほぼ6割の人が国外に逃げるか国内で自分の住んでいるところから追われた人たちというような非常に悲惨な状況になってしまったこととなります。これはダマスカスの街並みなのです中東の町という感じですね。それからこれがモスクです。モスクという場所がお祈りをする場所ではあるのだけれども、なんとなく家族でそろっていく場所。時には一日を過ごしてお祈りをしたり、食べたりとか、そのようなことをしたりするような場所なのだとおっしゃいました。これは市場に買い物に行っているところなのです。こんな感じでシリアというのは普通の国

II 活動報告

だったわけです。



IVYの支援はクルド自治区で行っているのだからクルド自治区へ逃げるということではあるのですが、クルド人という名前をお聞きになったことがある方いらっしゃいますか？ たくさんいらっしゃいますね。クルド人という民族はどのような民族かと言いますと、国を持たない最大の民族と呼ばれています。この地図の緑色のところが現在クルド人の方たちが暮らしているところなのですが、こんなに広範囲で暮らしているのに国を持っていないのです。この国境は第二次世界大戦の前に、フランスとイギリスとソビエトがそこに関わってクルドの人たちの国境を作らないで勝手に国境を決めてしまったがために、クルドの人々は分断されてしまったわけです。それでIVYはシリアからクルドに逃げてきた人々の支援をしています。それがなぜかという、イラクの北部にはクルド人自治区という所があるのです。そこはクルド人が多く住んでいる地域であって、そこにシリアのクルド系の人々が避難してくるからです。これはシリアのクルド自治区の一つなのですが、そこに逃げてきた人たち。これは国境沿いの写真なのですが、これはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の写真ですが、これを見ると、はるかかなた遠くまで列が続いているのが分かります。ですから国境にたどり着いたとしても、すぐに入ることができるというわけではなくて、やはり難民登録というものがようになってくるわけです。その手続きのた

めに下手すれば1週間ほどその場で留め置かれることもあります。

これはシリア難民の人たちが住んでいるカルゴスクというキャンプです。キャンプってどんなところなのかなって思っていたのですが、イラクの北部の乾燥地帯ですから広い場所が必要なので、何もない場所にこのようにテントが立ち並ぶということになります。これはキャンプに入った後に洗濯をしているところですが、逃げてくるまでに泥だらけになった服を洗濯するなど水の確保ができています。これはキャンプの中にある学校です。キャンプの中には学校もありますので、子供たちは学校に通うことができます。これはテントの中で何もないのですが、お祈りをする場なども確保されています。

食料の配給もあるのですが、乾いた物と言うか保存がきくもの中心が配給されています。この建物は診療所です。簡単な医療行為を受けることができる、つまりちょっとした怪我や風邪でしたらキャンプの中でも診察してもらうことができます。このようにキャンプに入るとそれなりに生活することが保障されますから、食べ物があるとか、住む場所、それから学校もある。怪我したりしてしまってもこうやって治療してもらえる場所もある。やっぱりキャンプにたどり着いてほっとするということがあると思います。キャンプの周りに何にもないのです。イラクの場合、クルド自治区は夏の最高気温は50度を上回ります。かなり暑いのです。それにもかかわらず、このように冬は雪が降ってかなり寒いのです。氷点下になったりならなかったりですが、やはり雪が降るくらいの寒さが訪れる場所です。

実際にどんな授業が行われているのかなってということなのですが、真ん中の席に座っている子もいるし、真ん中の子は椅子と机もないので床に座ったままです。それでほんとに

ぎゅうぎゅう詰めといった感じです。だから一人の先生が持つ子供の数ってどのぐらいのものだろうっていうのもあり、この中でどのような教育が行われているかということが一つの問題だと思います。シャワーとトイレですね。難民の方に聞くと、女の子の家族を持っているという方がここに一人では行かせられない。特に夜にトイレとかに女の子一人ではやらせられないと言っていました。だから戦争からは逃れては来ているのですけれど、キャンプの中もそれはそれでいろんな問題があるようです。それから汚水がそのまま流れているというような状況があったり、ごみが散乱しているということもあります。

この男の人たちは並んでいる列は、これはキャンプの中です。キャンプって勝手に出たり入ったりできないのです。出るための許可をもらうために並んでいる人たちなのですね。仕事を探しに行くと言っても、そんなに仕事があるところが近くにないのです。難民キャンプに何時までも戻って来いって言われたときに、時間が足りないようなことも起きています。それと、キャンプの中では、最低限の生活は足りているということが分かりましたが、それ以外のことが逆にいうとできないのです。それで現金というものがが必要です。

それともう一つ、食料の配給品ですね。これに足りないものはどうするのだろうって思うのですけれど、そうすると中にこのように生鮮食品を売る小さなお店があったり、古着を売っているような店もあるので。やはりそういうものを手に入れるためには現金がないといけません。もちろん、配給などの支援はキャンプの中にいれば受けられるのですけれども、それは必要最低限であって、十分かと言われるとそこは家族によって違うと思われれます。それで、キャンプの中に留まるのか、キャンプの外に出るのかということをもっと選ぶ時期が来るということ

になります。それで、IVYはキャンプの外で暮らしている人々の支援というものから始めました。私はこの支援を始めるまでは難民の人々は皆キャンプの中だけで生活しているのだと思っていました。ですが、このシリアのクルド自治区にいるシリア難民の人たちはキャンプ内で暮らしている人よりもキャンプ外で暮らしている人々のほうが多いのです。キャンプの中だと内に集中して暮らしている人々への支援ならば支援をするときも効率よく支援をすることができるし、配給するときだって効率よくできるのですが、キャンプ外に住んでいる難民の方々は、いろんなところにばらばらに住んでいるわけですから、大体は集まっていますけど、いろんな地域に分かれているところがあるので、なかなか支援が行き届かないという課題がありました。それで、キャンプ外に住んでいる人たちが、一体どんなところに住んでいるのかとは、言ったときに、クルド自治区は、実はシリアの内戦がおこる前までは経済状況が非常に良く、いろいろな建物が建ったとか、仕事も多くあったのです。ところがシリアの内戦が始まってしまったばかりではないのですが、経済状況が悪くなって、建設途中で建設をやめたしまった建物が多くあります。

それで、その中でも貧しい方、難民の人々の支援をしようということで、低い家賃の住居が多いところに住んでいる難民の人たちの調査をしたのです。そうしましたら、「平均月収は2万8千円で、その内1万8千円が家賃でとられると。これ平均なのですけれども、残りの1万円ですべてにかかりくりしています」というような答えが返ってきました。冬になると灯油代が8千円もかかってしまったりします。ですから、本当にほとんど何もお金がないような状況になってしまったりするということがあって、そこを少しでも改善できればいいなということで、2016年度は、シリア難民の1万3千人の方

II 活動報告

に灯油を配布しました。去年の場合は、大体ポリ缶で5缶です。1世帯100リットルということで、支援しました。100リットルくらいだと、家族によっては、1か月くらいでなくなってしまうりもするのですが、すごく寒い時期というのが3か月くらいなので、3か月のうちの1か月分の支援ができるということで、少しは助かったのではないかなという風に思っています。今年はずっと多く200リットル配ろうという予定でいます。衣類の支援ということもやっています。特にコート類を配布したのですが、ユニクロさんからちょうど提供していただいて7,500着の冬物衣料をいただきました。別にユニクロだけではないのですが、やっぱり日本の衣料って質がいいということで、すごく喜ばれます。長く持つということで。

ただ、ここで一つ問題だったということが、日本人って、やっぱり体格が華奢なので。日本のサイズのLサイズとかXLサイズでも入らないという方がいたのです。その方たちのためには、コートを別に買い足して配りました。

もう一つ、2013年に入ったころ、子供たちが何しているのかよくわからない、部屋の中に入るとテレビずっと見てるみたいな。それで、もしかして学校行ってないのかなってことに気づきました。そして、これは2013年当時ですけれども、最初にIVYが支援した3地区では3%しか、このころはまだシリア難民の子どもたちが通っていませんでした。今もう6年以上経っているのですけれども、避難してきてから一度も学校に通ってないって子どもがまだいます。6年間通ってないってことは、もし小学校1年生の学齢で避難してきたら、もう小学校まるまる行ってないって、そういう子供もいます。昨年実施したエルブリッシュ郊外の地区はまだ65%の子どもたちが小学校に通えていないということが分かって、親御さん

がやっぱり自分よりも読み書きができない、それから計算ができない、簡単な計算ができないというような大人になったらどうしようと、やっぱりすごく言っていました。その頃はなぜ通ってなかったのかという調査をしたら、シリアはアラビア語なのですが、クルドはクルド語で教育をしているのです。アラビア語とクルド語ではやっぱりわからないそうです。調査した時に。祖国に戻るのだったら、シリアに戻るのだからアラビア語で教育してほしいと。それから、クルドの中にアラビア語の学校っていうものが圧倒的に少なかったです。それと、あったとしても通えない。クルドの、IVYが支援しているエルベル市っていうところなのですが、公共交通機関がないのです。

ただ6年経って、最近、子供たちはクルドの学校に通っているのですね。アラビア語の学校じゃなくてクルドの学校しかないでクルドの学校に通っていると、アラビア語を忘れていると、親御さんが話していたそうです。子どもたちはやっぱりクルドの生活に順応することが親よりもずっと早いということが、いろいろ調査をすると分かってきました。

IVYは実は補習校っていうものをつくって、それをそれから公立校に昇格してもらってという事業をずっとやっています。実は、補習校って言うても小学校なのですが、この子たちは小学校の学齢をもうオーバーしている子なのです。これまで学校に全然通えていなかったから、IVYで補習校をやるっていうのを聞いて、それで通ってきてくれたのです。最初、みんなこれ15~16歳ぐらいになっていると思うのですが、小学生に混じって通ってきけるのだろうか、すごく思ったのですけれども、休まないで通ってきました。一生懸命やっぱり勉強していたそうです。ただ、学齢をオーバーしていますから、IVYがやっている補習校のようなインフォーマルな学校はOKですけど、公立校

に昇格した後は、この子たちはまた通えなくなってしまう。だから、こういう子供たちをこれからどうしていくのかっていうことは地域の中で問題になっていくのではなかとと思います。

同じ背景を持った子供たち同士と一緒に学校に通って勉強するっていうことが、やっぱり非常に、たぶん気持ちの上で、すごく、なんて言うのですかね、楽だったんだと思います。だから、こういうふうに難民の子どもたちの学校を作るっていうことで、そういうことが安心して通えるっていうことが起きる。でも、このクルドの社会の中に、どういふふうに学校に通った子供たちが入っていくためにはどうしたらいいのだろうと、っていうこともやっぱり考えることがあります。もう一つですね、IVYはこの他に校舎の補修ということもやっているのです。クルド人たちはお金がないので、補修ができないのです。イラクもお金がないのですけど、補修ができないから補修をして、それをずっと維持管理してくださいねっていうことでお願いしているのですけれど、そういう時にもよく言われるのは、午前はクルドの学校が使っていて、午

後はイラクの国内避難民の子どもたちが使っているとか言うそうですね、その両者間で校舎を維持管理するっていうことの話し合いとかがなかなかできてなかったりするのです。他の国から来たり、それから他の場所から地域からやってきたりした人たちが、共生していくことの難しさというのをやっぱり、支援をしていると感じることがあります。

これはシリアの子どもたちがシリアで学校に通っていた時の姿です。つまり、6年前までは、私たち日本の子どもたちと同じように毎日通っていたわけです。内戦が起きたことによって、ある日突然学校に行けなくなったわけです。学校に行けなくなるだけでなく、よその国に行かなくちゃ行けなくなるということが難民になるということなのです。だから、難民の人たちは、最初から難民になっているという変な錯覚に陥ることがあるのですけど、私たちと同じように生活していた人たちが、ある日突然難民という状況に置かれるっていうことなのだというふうに私は感じて支援を続けています。